

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03809

研究課題名（和文）ASDを合併する聴覚障害児の類型化と介入効果に関する縦断研究

研究課題名（英文）Longitudinal Study on Typing and Intervention Effects of Hearing Impaired Children with ASD

研究代表者

濱田 豊彦（HAMADA, Toyohiko）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：80313279

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,300,000円

研究成果の概要（和文）：ASDを合併する聴覚障害児の実態を把握するとともに、彼らの談話の特徴と視線の関係を検討することで指導方法を開発することを目的とした。全国調査では、聴児の5.5倍該当児がおり増加傾向が見られた。また、談話と視線の分析からは定型発達児、聴覚障害児、ASD児と比較したところ、合併児は最も談話が分かりにくく、整合性や結束性に関してASD児よりも有意に低い値となった。接続詞等が少なく語数が少ないことが示された。視線の群間の比較はできなかったため、極端な事例を分析したところ、特定の事物を長く見ている児は空想の話をし、全体を等分に見る傾向の合併児はストーリーを語るができず絵の説明になる傾向があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ASDのために視線が合わないことは視覚的なコミュニケーション（手話や読話）への依存度の高い聴覚障害児にはその影響が一層大きいことは想像に難くない。しかしながら、単一障害とどのような側面が異なるのかについては未整理であり、そのことが、合併事例に対する具体的で効果的な教育的介入を十分にできないでいる一因となっている。本研究において合併児の談話と視線の3つのパターンが示され、それぞれに応じた指導実践が行われた。典型事例を基に指導方法を体系的に整理することは、まさに今日教育現場が求めている知見を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a teaching method by understanding the actual conditions of hearing-impaired children with ASD and examining the relationship between discourse characteristics and gaze. A national survey found 5.5 times the number of hearing-impaired children, and the number is increasing.

We have found that their discourse has fewer conjunctions and fewer words per sentence. Gaze analysis showed no significant difference between groups. Therefore, we analyzed extreme cases by eye analysis. Children who saw a particular object for a long time tended to talk about fantasy (not shown). The children, who looked equally, could not tell the story the illustration meant.

For four years, we provided long-term guidance to children with complications and presented the teaching methods developed there at the workshop.

研究分野：聴覚障害児教育

キーワード：合併 聴覚障害 ASD 談話 視線分析 全国調査 指導法

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD とする）は視線が合わない等の独特の対人行動や文脈理解の困難さ、語の一義的理解などにより、コミュニケーションの困難が生じやすく、それ故、彼らのナラティブ（narrative：叙述）に関する研究が注目されている（藤野 2009，李 2011）。一方、聴覚障害児は、言語獲得や抽象的思考、そして社会性の発達に困難を示す者がいることが指摘され、ASD とメカニズムは異なるものの言葉で喚起されるイメージの狭さなど、結果として ASD に似た困難を持つことが少なくない。これまで申請者は平成 19～21 年度にかけての基盤研究(C) および 23～25 年度の基盤研究(B) の助成を受け、知的に著しい困難を持たない発達障害を合併する聴覚障害児に関する実態調査と指導方法や教材の提案を行ってきた（濱田 2012, 2013）。これらの研究を通して明らかになったことの一つは、教育現場で教員の負担感が大きいのが発達障害の中でも ASD と聴覚障害の合併事例であり、彼らの直面している困難が単一障害に比べより重篤で、各単一障害への指導方法を合わせただけでは解決しないものが少なくないということであった。ASD のために視線が合わないことは視覚的なコミュニケーション（手話や読話）への依存度の高い聴覚障害児にはその影響が一層大きいことは想像に難くない。しかしながら、単一障害とどのような側面が異なるのかについては未整理であり、そのことが、合併事例に対する具体的で効果的な教育的介入を十分にできないでいる一因となっている。例えば、対人トラブルへの指導場面でも子どもの説明が要領を得ないために適切な指導をできないことがあるが、その原因が聴覚障害ゆえの言語獲得の課題から生じているのか、ASD に起因する文脈理解の困難（状況把握の際の注意の焦点化や対象の心情理解の困難）から生じているのかなどのメカニズムを判断できないことが少なくないのである。

視線解析を導入し、困難状況を数量化したうえで困難の類型化を図り、その典型事例を基に指導方法を体系的に整理することは、まさに今日教育現場が求めている知見を提供するものである。また、本研究で得られる知見や方法論は、平成 28 年度から本格実施される障害者差別解消法で求められる「合理的配慮」や「基礎的環境整備」、個別の指導計画に基づく教育を推進していく上で資するところは大きいと考える。

2. 研究の目的

本研究では、ASD を合併する聴覚障害児の談話の特徴と視線の関係を検討して、その傾向に応じた指導法の開発を目指す。具体の目的は以下の 4 点である。

- (1) ASD を合併する聴覚障害児の困難と学校内の支援体制の現状を明らかにする。
- (2) ASD を合併する聴覚障害児の言語能力の様相について対照群と比較し、その特徴を明らかにする。
- (3) 状況把握に関連する視線解析と言語および社会スキルの特徴から合併事例の典型例を抽出する。
- (4) 典型例である対象児ごとの認知面に配慮した縦断的かつ長期的な指導を通じて、ASD を合併する聴覚障害児の体系的な指導方法を提案し公開する。

3. 研究の方法

目的(1)については、発達障害の中でも ASD に焦点化し、「言語・コミュニケーション」等に関する障害特性と校内での支援体制等について聴覚特別支援学校および難聴学級（通級含む）の教員を対象に全国調査を実施した。

目的(2)については定型発達児、聴覚障害児、ASD 児、ASD を合併する聴覚障害児（以下、合併児とする）の 4 群に対して、状況絵や 4 コマ漫画のストーリーを語らせ質的および量的評価を行った。またその際に、状況絵等に Area Of Interest(以下、AOI とする)を設定し Tobii 社製アイトラッカー TX300 を用いて、AOI ごとの停留時間や視線を移した回数を指標に視線分析を行った。

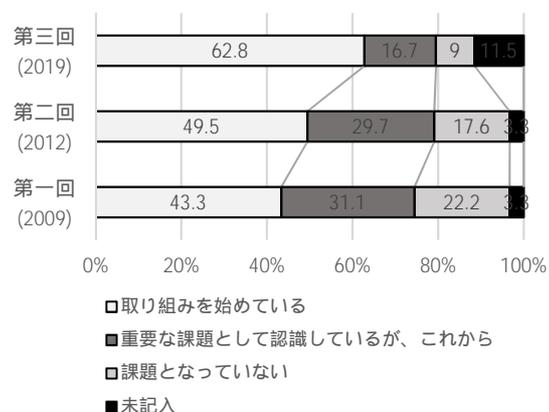
目的(3)については、目的(1)で実施した全国調査を基に対象児を聴覚障害児群と合併児群の 2 群に分け、日本語版 CCC-2（聴障版）を実施して 2 群間で比較した。

目的(4)については、2016 年から 4 年間にわたって 75 回の縦断指導を実施し、指導効果の検証を行った。またその成果を研修会で公開した。

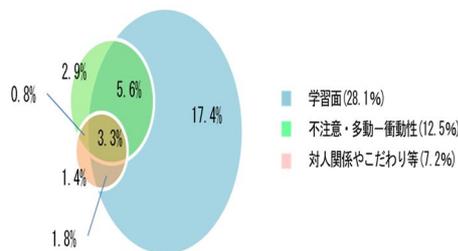
4. 研究成果

（目的 1）全国調査を実施し、聴覚特別支援学校では 72.2%の学校から回答があった。その中で発達障害の可能性のある幼児・児童・生徒に対する学校としての取り組みの有無について尋ねたところ、「取り組みを始めている」としたのは 78 校中 49 校(62.8%)、過去 10 年で最多になった（右図）。

また在籍児の実態に関して小学部で 1,023 名（重複学級を除くの在籍児の 62.6%）、中学部で 655 名分(同 60.2%)の回答があった。その結果、聴覚特別支援学校の単一障害学級



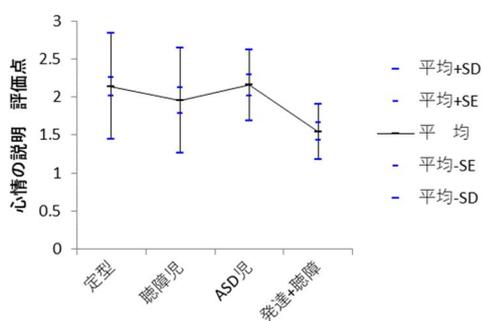
在籍時の全体の 33.1%に発達障害様の困難があり、「対人関係やこだわり」に課題のある ASD 様の困難を合併する聴覚障害児は 7.2%と過去 10 年の調査で最多となった（右図）。聴児と比べて 5.5 倍と高率となった。



加えて、学校として積極的に取り組みを行っている全国の聴覚障害特別支援学校(14 校の 26 名の教員)に対して聞き取り調査を行った。その結果、ASD の合併に教員が気づききっかけとしては、対人間関係の困難やこだわりの強さなど行動面で気づくことが多かったが、それに次いで多かったのが、手話コミュニケーションの際に「目が合わない」「共同注意がはかれない」など視線に関する不自然さを挙げるものが多かった。また、校内員会等を開催して学校全体で対応しているところが 9 校 (64.3%) と多く、授業担当以外の人的サポートをつけている学校は 82%に上った。それらの学校で苦労していることと挙げられたのが「保護者への支援」でありそのためにも、聴覚障害児の発達障害を診断できる医療機関との連携が重要であることが示唆された。なお、上記内容は日本教育新聞(2018 年 4 月 23 日)で「発達障害のある聴覚障害児への対応」として取り上げられた。

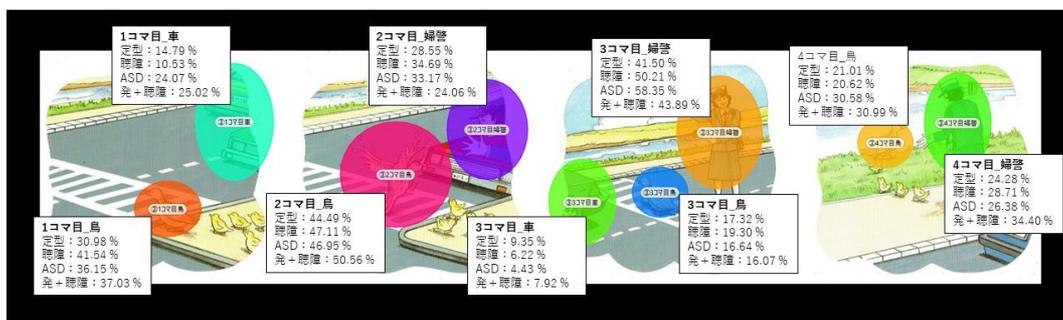
(目的 2) 続いて ASD と聴覚障害の合併児の談話の特徴と視線の関係について分析を行った。対象は、小学校に在籍する定型発達児 34 名、聴覚障害児 17 名(聴覚特別支援学校在籍)、情緒障害通級指導教室を利用する ASD 児 11 名、ASD を合併する聴覚障害児 8 名の計 70 名であった。

上記 4 群で談話の特徴を比較した。状況絵に関する説明を分析した結果「分かりやすさ」において合併児が統計上の優位さは得られなかったものの最も点数が低く、文としての首尾一貫性を示す整合性や言語的つながりをあらかず結束性に関して ASD 児よりも有意に低い値となった。一方、余分内容を付加するなどは ASD 児よりも低い傾向があった。そして、心情に関する叙述が最も少ないという結果になった(右図)。



量的分析においても接続詞等が少なく、一文当たりの語数が少ないことが示された。課題中の大人の介入数は ASD 児に次いで合併児が最も多く定型発達児の 3 倍以上になった。

談話においては、群間の違いは明確に示されたが視線分析においては、群間での差を明確に示すことができなかった。例えば、室内の物品に対して同様に視線を向けていても、その部屋を台所としてとらえているかどうかは視線だけでは判断できないことが、談話との乖離につながったと考えられた。



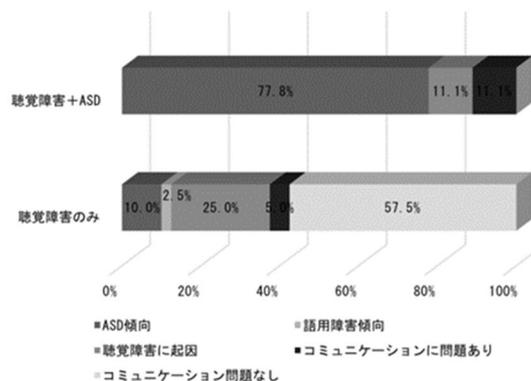
AOI ごとの停留時間 (平均値では 4 群間の極端な違いは見られない)

そこで、定型発達や聴覚単一障害群との間で視線の逸脱が極端な合併事例に対して分析を行った。その結果、状況の主題とは関係ない事物を長く見ている合併児の場合は、状況に関係のない(空想の話等)をする傾向があり(例: 上図の WISC の絵画説明課題で定型発達児に比して 2 倍以上 2 コマ目に視線を停留していた合併事例の説明は「カモメが川に行こうとしたから止まっていたら車が来て『ガーガーガ』と言って。そして女の子が現れて、交通、交通安全にして行って。トンネルを作って通って行ってくださいねと言った」となり、実際には描かれていないトンネルなどの発言が見られた)。一方、提示された状況絵全体を等分に見る傾向の合併児はストーリーを語るができず絵の説明になる傾向があった(例: WISC の絵画説明課題で定型発達児らが注視していない 4 コマ目にも他と同じ長さで注視していた事例の説明内容は「えっと歩く。

たぶんぶつが困る。ひとひととブーブレーキ。」となり、話と関係のないことは言っていないものの、主語が見られず、動きの羅列で終わり、説明した内容はストーリーとして経緯を説明できていない。これらの類型の他に、談話をする上で必要な視覚的な認知面に課題はないものの、聴覚障害児群以上に言語獲得の遅れが顕著で表出面に課題がある事例があった。視線分析のパターンで必ずしも談話が類型化できるわけではなかったが、極端な事例からは「一部に視線を集中して空想の話をする類型」「満遍なく視線を向けて事物の羅列になってストーリーを語れない類型」「視線は標準的でも ASD を合併することで言語力が著しく乏しい類型」のあることが推察された。

(目的3)次に、言語社会的スキルから合併児の鑑別を行う取り組みを行った。聴覚障害児は、言語・コミュニケーション発達の遅れや社会適応・行動上の問題等が起こった時には、聴覚障害のみに起因する問題として判断されがちで、合併している発達障害の発見が遅れるといったことや、適切な対応がなされないままになるということがありと指摘されている。聴覚障害児の社会適応・行動上の問題から ASD 傾向を鑑別するスクリーニングの有用性を示す先行研究はあるが、言語・コミュニケーション発達の遅れから ASD 傾向を鑑別するスクリーニング検査はまだない。そこで言語発達やコミュニケーション面の問題からその要因となる障害をスクリーニングすることができる日本語版 CCC-2「子どものコミュニケーション・チェックリスト第2版」(聴障版)を用いて、聴覚障害児の抱えている様々なコミュニケーション上の課題を、ASD や語用論的言語障害傾向に起因する言語面の問題と聴覚障害ゆえの言語獲得の課題に鑑別することを試みた。聴覚障害児全体においては特に領域 A (音声),領域 B (文法),領域 G (文脈の利用)の平均値が低かったものの、ASD 児が苦手とする領域 E (場面に不適切な話し方),領域 H (非言語的コミュニケーション),領域 J (興味関心)の平均値は高いことが示された。内的一貫性が基準を満たしているなどの条件に該当する 49 名分のデータを、ASD 合併群と聴覚障害のみ群に分類した。結果、49 名中 9 名 (18.3%) に ASD 傾向が認められた。

合併群(n=9)の GCC(コミュニケーション全般の能力)の平均値は 44.6 (SD=15.3)、聴覚障害のみ群(n=40)の GCC の平均値は 63.4 (SD=21.4)で、t 検定の結果、GCC に関しては 2 群間で有意差が認められた。また、合併群の SIDC (社会的コミュニケーションの逸脱)の平均値は 1.2 (SD=11.4)、聴覚障害のみ群の SIDC の平均値は 10.2 (SD=12.9)であった。SIDC に関しては 2 群間で有意差が認められなかった。領域 D (首尾一貫性)で有意差がみられたことと、領域 G,I で有意差がみられなかったことから、領域 D のような問題が、ASD 傾向のある聴覚障害児に特有のものである可能性が示唆された。また、少人数のクラスやコミュニティの中では、領域 I の質問項目にあるような社会的関係に関する問題が起こりにくいことが考えられ、今後の聴覚障害児に CCC-2 を実施するときに留意点になる可能性が示唆された。



(目的4) ASD を合併する聴覚障害児を対象に認知面に配慮した 4 年間 (6~8 人の事例に対し年間約 20 回) にわたる縦断的指導を行った。以下、80dBHL 台の聴力で ASD の傾向に加え視覚処理にも困難のある一事例 (A 児) に対して、背景を見ながら字幕を読む練習を、視線分析を活用しながら行った。その結果、A 児が字幕を読み取る際の特徴は、内容が難しく理解できないと感じる字幕において、字幕の注視や読字順の追視に課題があること、字幕以外の興味の対象があると、字幕の注視や読字順の追視が困難になること、字幕の文章を理解し、言葉で分かりやすく説明する過程において、困難があることであった。に対する支援方法として、字幕を見る前に概要を理解させることや、容易な課題から行い成功体験を積むことが考えられる。

に対する支援方法としては、キーワードを探す練習や、視覚教材を用いて文章の流れをつかむ練習を行うことが考えられ、いずれも指導後の課題では視線の適切な活用とともに成績の向上が見られた。

また、別の事例では、状況絵の周辺を確認してから主題を見せる方法や、絵の示す状況について言語的にヒントを与えることで談話に改善が見られた。これらの、知見を踏まえて都内と山形で教員研修を行った。

<参考文献>

藤野博, 米山由希 (2009) 発達障害児に対するソーシャルナラティブによる介入の効果子, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 60: 407-416.

李熙馥, 田中真理 (2011) 自閉性スペクトラム障害者におけるナラティブ研究の動向と意義. , 特殊教育学研究 49(4), 377-386.

濱田豊彦他 (2012) 特別支援教育における発達障害を有する聴覚障害児の現状と支援の実際: 手話活用児を中心に. , コミュニケーション障害学, vol.29, 2, 114-121.

濱田豊彦 (2013) 発達障害を合併する聴覚障害児の鑑別と指導法に関する研究 (科研報告ホームページ). <http://www.hearinglab.info/page/kenkyu00.html>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 石坂光敏, 濱田豊彦, 熊井正之, 大鹿綾, 稲葉啓太	4. 巻 46
2. 論文標題 通級指導学級に通うASD児の談話の特徴	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 聴覚言語障害	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 喜屋武 睦, 濱田 豊彦, 澤 隆史	4. 巻 58
2. 論文標題 聴覚障害児の韻律情報の活用に関する検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 317-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田能理子, 濱田豊彦	4. 巻 69
2. 論文標題 ASD児・聴覚障害児の視覚認知に関する文献検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 243-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木友里恵, 濱田豊彦	4. 巻 69
2. 論文標題 難聴通級指導教室通級児の聴覚活用及びコミュニケーションにおける困難の様相に関する調査 SR (復唱) 課題による検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 255-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩田能理子, 濱田豊彦, 喜屋武睦, 天野貴博, 鈴木友里恵, 石坂光敏	4. 巻 68
2. 論文標題 ASD児・聴覚障害児のナラティブに関する文献検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 245-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 喜屋武睦, 濱田豊彦, 天野貴博, 岩田能理子, 鈴木友里恵	4. 巻 68
2. 論文標題 発達障害様の困難を示す聴覚障害児に対する教材及び支援方法の工夫に関する一考察(2)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 221-226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 天野貴博, 濱田豊彦	4. 巻 68
2. 論文標題 発達障害様の困難のある児童・生徒への聴覚障害特別支援学校の取り組みに関する一考察 全国の聴覚障害特別支援学校に対する実態調査の結果に基づいて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大鹿綾, 渡部杏菜, 濱田豊彦	4. 巻 48
2. 論文標題 特別支援教育制度開始以降の発達障害の可能性のある聴覚特別支援学校在籍児に関する研究 過去10年の全国聴覚特別支援学校調査の動向	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 聴覚言語障害	6. 最初と最後の頁 91-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部杏菜, 濱田豊彦, 櫛山櫻, 大鹿綾	4. 巻 41
2. 論文標題 聴覚障害幼児における音韻意識形成の発達的特徴 音情報と文字情報の優位性の違いから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森崎茜, 濱田豊彦	4. 巻 71
2. 論文標題 聴覚障害幼児の音韻分解能力の発達と口形・視線との関連における検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 365-374
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大鹿綾, 森崎茜, 濱田豊彦
2. 発表標題 第3回発達障害に関する全国聾学校調査結果について
3. 学会等名 第56回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田弥咲, 濱田豊彦
2. 発表標題 子どものコミュニケーション・チェックリスト第二版 (CCC-2) 日本語版の聴覚障害児における有用性の検討
3. 学会等名 第56回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大鹿綾, 瀧田豊彦
2. 発表標題 難聴通級指導教室・特別支援学級における発達障害に関する全国調査 - 教員の印象調査と指導形態から -
3. 学会等名 第63回日本音声言語医学会総会・学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大鹿綾, 瀧田豊彦
2. 発表標題 発達障害様の困難のある聴覚障害児に関する全国聾学校調査 聴児調査（文科省、2012）との比較を中心に
3. 学会等名 第63回日本聴覚医学会総会・学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩田能理子, 瀧田豊彦
2. 発表標題 ASDを合併する聴覚障害児のナラティブの特徴と視線の関係について
3. 学会等名 ろう教育科学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 喜屋武睦, 小須田峻介, 瀧田豊彦
2. 発表標題 LD様の困難を示す聴覚障害児に対する支援の検討
3. 学会等名 ろう教育科学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木友里恵, 瀧田豊彦, 大鹿綾, 喜屋武睦, 岩田能理子
2. 発表標題 ADHD様の困難のある聴覚障害児と母親の変容に関する事例報告 3年間の支援記録及び連絡ノートをもとにして
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田能理子, 瀧田豊彦, 大鹿綾, 喜屋武睦, 鈴木友里恵
2. 発表標題 集団を苦手とする聴覚障害児に対する支援の一事例
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 天野貴博, 瀧田豊彦
2. 発表標題 発達障害様の困難のある聴覚障害児への気付きシートの作成の試み 全国の聴覚特別支援学校に対する聞き取り調査を通じて
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田能理子, 瀧田豊彦, 大鹿綾, 喜屋武睦, 天野貴博, 鈴木友里恵
2. 発表標題 発達障害を併せ持つ聴覚障害児に対する支援の一事例 -4年間の指導を通して-
3. 学会等名 第54回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 天野 貴博, 濱田 豊彦, 大鹿綾, 喜屋武睦, 新海晃, 岩田能理子, 鈴木友里恵
2. 発表標題 ASDを併せ有する聴覚障害児に対する感情理解への支援 視覚的教材・ICTを活用した教育的介入を通して
3. 学会等名 第54回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 濱田豊彦
2. 発表標題 聴覚障害児の生活を支える - 生活支援の観点から教育の役割を考える -
3. 学会等名 第54回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木友里恵, 濱田豊彦, 大鹿綾, 喜屋武睦, 天野貴博, 岩田能理子
2. 発表標題 ADHD様のある聴覚障害児に対する支援の事例報告 2年間の支援記録をもとにして
3. 学会等名 第54回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 喜屋武睦, 濱田豊彦
2. 発表標題 聴覚障害児の関係節構文における理解力と音読時の韻律情報の活用能力との関係に関する検討
3. 学会等名 第45回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田能理子
2. 発表標題 ASD を合併する聴覚障害児の談話の特徴：ASD 児との比較を通して
3. 学会等名 第45回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡部杏菜, 瀧田豊彦
2. 発表標題 聴覚障害児の音韻意識習得型と単語書字に関する縦断的研究 音韻分解課題の誤答分析による分類を用いて
3. 学会等名 第57回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田能理子, 瀧田豊彦
2. 発表標題 ASDを合併する聴覚障害児の談話と視線の関連について - 聴覚障害児との比較を通して -
3. 学会等名 第57回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大鹿綾, 瀧田豊彦
2. 発表標題 発達障害を併せ有する聴覚障害児の顕著な特徴について聴覚障害児版発達障害のスクリーニング方法の開発にむけて.
3. 学会等名 第57回日本特殊教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大鹿綾, 瀧田豊彦
2. 発表標題 聴覚特別支援学校に在籍する人工内耳装用児に実態について 発達障害に関わる全国調査を通じて
3. 学会等名 Audiology Japan
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 宮本信也, 石塚謙二, 西牧謙吾, 柘植雅義, 青木健, 土橋圭子, 今野正良, 廣瀬由美子, 渡邊慶一郎, 瀧田豊彦	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 424
3. 書名 改訂版 特別支援教育の基礎	

1. 著者名 日本言語障害児教育研究会編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 304
3. 書名 基礎からわかる 言語障害児教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本教育新聞(2018年4月23日)に「発達障害のある聴覚障害児への対応」で本研究の成果が取り上げられ掲載される。</p> <p>片倉和彦(編) 高橋秀志、稲淳子、瀧田豊彦、森せい子(著)(2018)聴覚障害者のメンタルヘルスとケア 適切なサポートのために、社会福祉法人 聴力障害者情報文化センター(平成29年度全国生活協同組合連合会助成事業)の中に本研究成果の一部を記す。</p> <p>瀧田豊彦(2017)聴覚障害児教育の専門性を身につけるための指導者用教材DVD解説書 発達障害を合併する聴覚障害児編(日本郵便年賀寄付金助成)に本研究の成果の一部を掲載する。</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	長南 浩人 (CHONAN Hirohito) (70364130)	筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授 (12103)	
研究 協力者	大鹿 綾 (OSHIKA Aya)		
研究 協力者	喜屋武 睦 (KYAN Chikashi)		
連携 研究者	藤野 博 (FUJINO Hiroshi) (00248270)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
連携 研究者	竹鼻 ゆかり (TAKEHANA Yukari) (30296545)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	